

同窓会は鳥羽小を応援しています

若狭上中―Cをバックに



入学式

鳥羽つ子の幸せと夢の実現のために



平成27年3月
第24号
鳥羽小学校同窓会
印刷：(有)平田印刷





ご挨拶

同窓会長 澤本 啓一

会員の皆様、お元気で過ごしてはいかがでしょうか。平成二十六、二十七年と会長を務めさせていただき、皆様が大変お世話になることと思いません。どうぞよろしくお願い申し上げます。

今年も事業計画どおり、この会報を皆様にお届けすることができました。会報発行は本会の大きな柱であり、言うまでもなく地元内外を問わず、全国の会員の皆様のご協力のおかげで成り立っている事業です。毎号、読ませていただくたびに、ご寄稿くださった皆様の母校と故郷への深い愛着が伝わってきて胸が熱くなります。

近年、会計報告などの資料的な内容に加え、会員の皆様の生の声を載せた会報は少なくなってきたと聞きます。さらに会自体の活動が休止状態にある地域も出てきています。

このような状況の中、本会のよう、どの号の発行にあたっても編集委員会からの原稿執筆のお願いを快くお引き受けくださる会員の皆様に、改めて厚く厚くお礼申し上げます。そしてそんな会員氣質が脈々と受け継がれている鳥羽小同窓会を誇らしく思うと同時に大きな責任を感じております。



科学技術のめざましい進歩とともに、社会環境は大きく変わり、価値観も多様化しています。便利でおもしろい反面、ともすれば子供たちの健やかな成長に悪影響を及ぼしかねない価値観や製品が甚に溢れています。子供たちにとっては誘惑が多く、私たち大人にとっては子供たちを護ることが難しい時代になったと言えるかもしれません。

学校、家庭、地域が連携し子供たちを育てることが必要不可欠な今、私たち同窓会も地域の一員としてどんなお手伝いができるでしょうか。皆様からのご提言、ご助言、ご批判などを頂戴しながら、その答を模索していきたくと考えております。今後とも変わらぬご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。



ご挨拶

校長 高橋 繁 忠

鳥羽小学校同窓会会員の皆様方におかれましては、日々ご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。鳥羽小の校長を務めさせていただき二年目を迎えました。日頃より地区内の皆様方はもとより、同窓会会員の皆様方には陰に陽に学校教育にお力添えをいただいておりますことに対しまして深く感謝申し上げます。おかげさまで、本校の子ども達は元気で健やかに育っておりますが、一つのエピソードを通じてその一端をご報告させていただきます。と思えます。

昨年の十月に若狭町の小学校陸上記録会が行われました。本校児童は日頃の練習の成果を発揮してよく頑張っていました。大会中の頑張り以上に嬉しく思えたことがありました。

閉会式終了後、鳥羽小まで送ってもらえるバスが来るまでに少々待ち時間があったのですが、会場の三方小学校の児童がテントや机などを片づけている姿を見ていた鳥羽小の児童達が誰からともなく、その片付けを手伝い始めたのです。もしかすると教師の一言があったのかもしれませんが、誰も文句を言ったりすることもなく、

ごく自然にしかも楽しそうに手伝っているのです。私はこの姿を見ていて本当に嬉しく思うとともに、こんな子ども達が育っている学校の校長を務めさせていただいていることのありがたさと、このような子ども達が育つ地域の温かさを感じた次第です。

人の行動には必ず背景があると云われています。『誰でもいいから殺してみたかった。』と言って無差別に人を殺傷する人がいるかと思えば、一番愛すべき我が子を虐待し、死に至らしめるような人もいます。マカデミアナツツの提供の仕方が間違っていると云って、離陸準備中の自社航空機を搭乗口まで戻した副社長の、いわゆるナツツリタインの話も話題になりました。

人は心のゆとりを失うと、冷静な判断が出来なくなるようですが、その反対に落ち着いた環境で愛情を受けて育つていれば人のことを思いやる事が出来る心のゆとりを持った人間が育つのではないのでしょうか。そしてまた、人のために役立てたことに喜びを感じることが充実感を生み、次の行動につながるのだと思います。そんなことを考えながら鳥羽小の子ど

も達が健やかに育っている今の環境を嬉しく思う毎日をごさせていだいております。

学校の日々の様子はホームページの『鳥羽つ子日記』のコーナーで見てください。『若狭町立鳥羽小学校』と入力していただければ本校



ふるさと

西山和哉

(昭和32年度卒)

海士坂を出てちょうど五十年になりました。村から都会に来て得たものと失ったものと、私の収支は結局ゼロやなあと 생각합니다。

数年前、私の職場で若手教員から『ちびっこ自然クラブ会報』のインタビューを受けました。まさにこれが昔と今の私です。原文のままでご紹介します。

先生インタビュー

学校法人八柱学園(自然クラブ)

イ 「それではよろしくお願ひします。西山先生にとって自然とは何でしょう。」

西 「私にとって自然とは故郷の自然であり、それは心の問題のようには思えません。」

イ 「なるほど、そのへんのところ

ホームページはすぐに見つかりますので一度ご覧ください。

それでは鳥羽小学校の子ども達が健やかに育っていることを報告させていただきます。会員各位のご健勝を祈念してご挨拶に代えさせていただきます。

を詳しくお話してください。」

西 「かつて私は若狭の寒村に生まれ、家では羊、チャボ、ウサギを飼っていました。近隣には牛や馬もいました。」

イ 「ほう、のどかな感じがしますね。」

西 「少年時代の私は、川では小魚やどじょうを捕まえて、すぐに七輪で焼いて醤油をかけて食べました。当時はいつも空腹でしたね。」

イ 「都会にいては考えられないことですね、他に何か？」

西 「はい。山では色々な木の実、椎の実、野生の梨や山栗、あけびなどをサルのように食べていました。海では素潜りで、サザエ、アワビ、魚を採って村の人から『サザエ採りの名人』と言

われ、うれしかったものでした。」

イ 「まさに、知られざる一面を見せられたと思います。」

西 「へへへ。あの頃が本当に懐かしいですよ。そういえば、冬には雪の中、わなを仕掛けて野ウサギやカモ、小鳥を捕まえて食卓をにぎわし、祖父にほめられたものでした。」

イ 「どっふりと自然の中で生まれ育ったと言えますね。どうぞ続きをお話してください。」

西 「田舎でのこのような体験は、私の心にどのような影響を与えたのでしょうか。ただ、自然に対する畏敬の念と感謝の気持ちが高まりましたのは確かです。」

イ 「現在の生活の中で西山先生と自然のかかわりは？」

西 「都会に来て四十七年間、夢で生きてきました。今は、本を読む楽しみと音楽を聴くことで何とか心のバランスを取っていますが、自然との触れ合いの中で何かひとつ足りないものを感じる歳になりました。」

イ 「今後の西山先生と自然との関係は？」

西 「最近、故郷に帰省する度にづくづく思うことがあります。自然のふところを抱かれて、土を耕し、種をまき、収穫の喜びと感謝の気持ちで生き生きと生活している母の姿。そして何とも言えない夜の静寂さ。星空の美しさ。空気のうまさ。小鳥のさえずり…。これらはふるさとの自然が私を呼び戻し始めたのか、私の心がふるさとの自然を追い求め出したのか、どちらかでしょうね。」

イ 「ふるさとへの思いや自然を愛する気持ちがにじみ出て、大変感銘を受けました。ふるさとのお母さまへ、よろしくお伝えください。本日はありがとうございました。」

イ II インタビューアー

西 II 西山先生 (千葉県松戸市 在住)



故郷に感謝

森下 充

(昭和36年度卒)

私は今で言う団塊の世代の終わ

りに近い、昭和三十六年に鳥羽小

学校を卒業いたしました。その頃は、毎年七十名以上の卒業生が学舎を離れていきました。

今般縁あつて同窓会報に寄稿することになり、同封頂いた会報を拝見しますと、平成二十五年度の卒業生が十八名と；改めて少子化の進行に愕然としております。

私は地域金融機関の小浜信用金庫に勤務しており、仕事柄少子化がもたらす金融業界や地域産業への影響が、どのような形で現れて来るのか危惧している一人でございます。

さて、ふるさと大鳥羽を離れて四十年以上たった今、私達の小学校の頃の穏やかな鳥羽谷の風景が、高速道路の開通により大きく変貌し、時の流れを感じながら小学校時代を思い浮かべ執筆しています。叶うならば、鳥羽川辺りの懐かしの土手で、魚釣りをしながら思いを馳せれば良かったな。思ひ出は数多くあるはずですが、なかなか思ひ出せません。

しかし、最初に脳裏に浮かんだことは、低学年のころ母親に連れられて、毎日お医者さんに通いながら、長期療養を余儀なくされたことです。

このことがきっかけで、体力を付けるため、少年野球の練習に汗を流した夏の日々です。グラウンドを飛び跳ねながら無事やり遂げた充実感が蘇ってきます。野球は私の青春を語る時、切り離すこ

とができません。

また、友達と連れ立って遊びや悪さをし、校長先生や諸先生に叱られ、廊下に立たされたことは、今では懐かしい思い出です。

小学時代裏山でチャンバラをして怪我をしたり、させたり、冬凍った田んぼの上を歩いて学校へ行ったり、鳥羽川で夜遅くまで魚取をしたり、上中へ白転車で遊びに行ったことなど、懐かしく思い出されます。小学校時代の色々な体験が、今の自分に活かされていると、しみじみ思います。

小浜信用金庫に就職後は、結婚し小浜に住むことになりました。が、心は何時も鳥羽にあります。小浜弁に染まる事なく、今でも堂々の大鳥羽弁一筋で通しております。思うに、心のどこかで鳥羽小学校出身の気概を示したいのかも知れません。また、鳥羽谷の変わらぬ特性は、寒暖の差による風情のある鳥羽霧、心温まる人情、そして豊かな自然環境だと思えます。小浜に居ても、鳥羽出身の友達とは今でも交友があり、鳥羽からは離れることができない毎日です。

今わが国は、アベノミクス効果により輸出産業を中心に立ち直りつつあるものの、グローバル化の時代、地方への波及効果が乏しく、大変厳しい経済状況が続いています。しかし、六十五歳を超えても働ける体に感謝し、弱音を吐かず

どんなことにも果敢に挑戦していきたく思っています。

また、習字は苦手ですが毎年筆を執っており、今年の書初めは「三省」としました。私なりに「三省」とは、一日に何度も自分のしたことを振り返り反省し、過失の無いように努める。そして、常におこらず、自分を正当化せず、

自分を省みる、その繰り返しが出るように日々励んでいきたいと思っています。

終わりにあたり、鳥羽小学校のますますのご発展と、教諭の皆さまならびに卒業生の皆様のご活躍とご健勝を心よりご祈念いたします。(小浜市 在住)



日本語指導を介して

大 畑 佳代子

(昭和37年度卒 旧姓 西川)

「先生、動詞の『食べる』と『しゃべる』はどちらも『くべる』ですから、『くっています』の時も『食べています』『しゃべています』でいいですか?」

「いいえ、ダメですよ。『食べる』は、動詞2のグループですから『食べています』でいいけれど、『しゃべる』は、動詞1のグループだから『しゃべっています』と、小さい『つ』が入りますよ」と、スタッフの優しい声が聞こえてくる。

かと思えば、その隣から「先生、教えてください。『日本で暮らす』や『日本で生活する』『日本で働く』は全部『くで』を使います。でも『日本で住む』はどうしてダメですか?」

「ああ、それはね、場所の『で』のうしろには、『働く』や『スポーツをする』のように、必ず動詞のある動詞が来るのよ。そして、『く』のうしろには……」と、これまた別のスタッフによる丁寧な説明が耳に入ってくる。

「それじゃ、『くでおく』と『くである』の違いは何ですか?」
「ああ、またまた始まった!」
これは毎週火曜日の午後、盛岡市内の公民館を使って外国人向けに開いているボランティア日本語教室の始業前の一場面である。

正式名を日本語交流室「じよい」という。

郷里の若狭を離れて十年を過ぎた頃、偶然にも目に留まった岩手県主催の日本語ボランティア養成

講座を一年がかりで受講し終え、賛同者を募って平成七年に立ち上げたのがこの日本語交流室「じょい」である。

午後一時三十分近くになると、市内に住む岩手大学の留学生や、外国から盛岡近辺へ嫁いできた主婦たちが、あちこちから公民館を指してぞろぞろと集まってくる。

中には、日本での生活に何の不安も感じないほど日本語が堪能な主婦でも、より日本人に近い話し方を身に付けたいと熱心に通ってくる。

留学生はといえば、大学での授業で質問し切れなかった疑問を山ほど抱え、一時半からの始業を待ち切れずに、スタッフのだれかれ構わず質問を投げかけてくるため、教室内はまるでお祭り騒ぎである。

日本語の学習者の国籍は全世界と広い、大多数はアジア系であるが、珍しい国ではパプアニューギニア、ケニア、ソロモン出身者などもいて、鮮やかな衣裳を身にまとった部族の踊りを披露してくれたこともある。

日本語指導のスタッフは現在十五名、平均年齢は立ち上げ当時のメンバーが殆どのため六十三歳と高い。しかし、みんな指導の為に準備は大変だけれど、やり甲斐があり楽しいと惜しみない情熱を傾けてくれている。

学習者にとって、日本語教室の中ではスタッフは先生だが、一歩外に出れば優しいお父さんやお母さんの存在、また人生の大先輩でもあるから何かにつけ頼りにして来る。

一方、私たちも日本語指導を紹介し、日本に居ながらさまざまな国の人と交流することによって異文化を肌で体験できたり、また日本の歴史、文化、習慣の素晴らしさを再発見できる貴重な場でもある。

日本の素晴らしさといえば、外国人が日本に来てまず感心するのは、社会秩序の良さや礼儀正しき、また時間の正確さであろうか。夜の車の往來のない交差点で信号が青になるまでじっと待っているのは日本人だけだと。また、朝夕のラッシュ時に一列にきちんと並んで待つことや、二〇一一年の東日本大震災のあの惨事の中、なんの暴動も起こらなかったことも不思議がついている。その他、トイレのメロディー音姫、自動シャワー、自動開閉フタなどにも大いに感激してくる。アメリカやヨーロッパでも、シャワー音はあってもメロディー付きではない。

先日も非常勤で通っている大学の日本語授業で、学生がトイレへ行った切り三十分経っても帰ってこないため、心配になって他の学生に様子を見に行ってもらったところ、便座が暖かく、心地良いメ

ロディーに誘われてつい居眠りしてしまったとのこと。教室内は爆笑の渦だった。

日本の便利さについては、二十四時間営業のコンビニ、また心地よい店員さんの「いらっしやいませ」など話題は尽きないが、話を日本語交流室「じょい」に戻そう。

何年かに一度ではあるが、奇想天外な空想を追い求めて日本へやってくる留学生に出会うことがある。

今年の春も、「戦国、江戸時代」を研究テーマに日本へ留学して来たという大の忍者好き、今でも忍者の存在を信じて止まない一人のフランス人レオ君が、忍者さながらの黒の上下に真っ赤な紐のいでたちで入会してきた。自称「日本

大好き人間」だけあって日本語も実に堪能である。

その彼が、突然私に向かって「先生、日本の忍者ってホントにカッコ良くてエライ人ですね。いつでもどこで生活しているんでしょうか。一度でいいから会いたいです」と、手裏剣を投げる真似をしながら聞いてくるので、「そうね、戦国や江戸時代には随分活躍し、重宝がられたのでしようね。でもねレオ君、残念ながら、現代の日本には忍者なんて絶対いませんよ」と言葉を返すと、「キッ!」とした顔をこちらに向け、「いえ、絶対います! 忍者は今でもいますよ! どこかに潜んで、ひそかに厳しい修行に耐えているのです。そして、いざという時のためにいろいろなワザを研究しているのに違いありません。私は『戦国、江戸時代』を研究テーマに、忍者の存在を確かめにわざわざ日本へ留学したんです。私は忍者の存在を証明して見せます」と全くひるむ様子もない。そして、「ところで、先生『スッパ抜く』の『スッパ』の意味って知ってますか?」と、言ってきた。「えっ! 『スッパ抜く』の『スッパ』!?!?!」

思わぬ質問に面食らい「あの一、それは…、ちよっと待ってね」と言いながら、頭の中で「スッパ、スッパ、スッパ」と繰り返しながら「刀をスッパ!?!?!と抜くから『スッパ!』いや違うな」などと



(イタリアの留学生ミリアムと)

天井を思いっきり睨んでみると、レオ君がニコツ！と笑って「教えてあげましょうか。それはね。忍者のことですよ」「ああ、またはや忍者か！」「つまり、戦国時代の大名が、敵の陣地へスパイとして送り出すために雇った忍者のことです」と、どこまでも忍者に詳しい。更に続けて「そして、忍者は物理も数学も得意だったんですよ。例えば、暗闇の中で、こちらの屋根から遠く離れた向こうの屋根に飛び移る時、目的地までの距離を瞬時に測り、それを底辺として三角形を作り、どこで宙返りすれば目的地に正確に着けるかを一瞬の内に計算したんですよ。スゴイでしょう！」と、いつの間にか周囲の学習者やスタッフまでも巻き込んで忍者論をぶっている。挙句の果て「日本の人たちは、忍者さんの力を知らなさ過ぎる」と止めを刺され、「そうか忍者は彼にとつては英雄か！」と、みんな



鳥羽小学校の頃

清水 邦夫

(昭和51年度卒)

私が鳥羽小学校を卒業してから、早や四十年近くが過ぎようとしています。その後、中学校、高校、大学へと進みましたが、なぜ

か小学校時代のことが一番記憶に残っています。小さい頃から背が低く、小学校ではいつも一番前だったことが思

で顔を見合わせるより他はなかった。彼のみならずヨーロッパ人の中には忍者ファンが多いのは確かである。

このような経験は稀としても、日本語指導を介し、異文化の人たちが日本の文化や歴史をどのように眺めているかを知る貴重な活動でもある。

鳥羽小学校同窓会「同窓会報」へ寄稿するに当たり、小学校にまつわる懐かしい思い出も数え切れないほどあるが、これからの人生をも含め、私の一番の思い出となるであろう現在の取り組みについて述べさせて頂いた。

最後に、母校である鳥羽小学校の更なる発展と繁栄をお祈りするとともに、孫に当たる後輩たちが、少しずつでも異文化に触れる機会を持ち、国際感覚を養いつつ成長してくれることを願っている昨今である。(岩手県八幡平市 在住)

い出されます。今でも体が細いで、会う人ごとに「体大丈夫か？もつとたくさん食べないと」と言われませんが、自分では人並みに食べているつもりで、おかげさまで特に大きな病気もせず、毎日元気に過ごしています。

小学校では一年から六年まで、平井先生、田村先生、左近先生と担任はすべて女の先生でした。どの先生もとても優しく、熱心できちんとした指導をしていた。先生方、ありがとうございます。

もう十年近く前になりますが、初めての同窓会を開催するというハガキをもらい、参加しました。有志の方が企画してくれたものです。参加したのは、小学校の同級生二十四名と恩師の先生二名。当時、私は仕事の関係で福井市に在りており、また、県外で働いている人もいたので、参加者の中には、二十年以上会っていない人もいました。が、やはり同級生。顔を見ただ途端、小学校時代に戻ったように、行ききのバスの中から、すぐに打ち解けた雰囲気になりました。呼び方も小学校の時と同じあだ名で呼びながら、当時のことを話し合いました。ずっと覚えていたわけでもないのに、頭のすみから、その場面がスッと浮き上がってくるのだから不思議です。〇〇が□□とよくケンカして、泣きながら追い回していたこと。放課後にソ

フトボールをしていて、スライディングが上手いとほめられたこと。休み時間に教室ですもうを取っていて、転んで頭を切つて、校長先生に病院に連れて行つてもらったこと(自分のことです)等々。小学生の頃に戻って話をしているながら、お酒を飲んでいるのも不思議な気分でした。自分個人的には、「邦夫、背が高くなったんと違う？」と言われたのが、一番うれしかったです。

田村先生と左近先生も、四十年



近く経っているのかかなり変わら
れていたはずですが、私には、昔
と変わらない姿に映りました。一
人ひとりに声を掛けていただいた
りして、何年経っても、先生と生
徒なんだなと思つたものです。

今、この原稿を書くために、同
窓会終了後に送ってもらつた、当
日の集合写真やCDを取り出して
きて、見ています。また、小学
校の登下校時にいろいろな遊びを
したことや、休みの日には鳥羽川で
魚釣りをしたり、近くの裏山に



忘れていた出来事

池田 貴 一

(昭和53年度卒)

ふと気が付けば私もいつの間
か五十歳前：
一九八五年、敦賀工業高校を卒
業した私は当時小浜市にあった現
在の会社に就職したが、二〇〇〇
年にその会社の統廃合によって私
の勤務地は敦賀市に移り、そして
二〇一四年、今度は担当業務の大
阪移転に伴い私はこの歳になって
初めて単身赴任を強いられ、現在
は社宅から会社までの道のりを自
転車通勤するサラリーマンをして
いる。

私はまだ小さく、丁度今は無き

登って遊んだことなども思い出し
ています。鳥羽小学校で過ごした
六年間は、今思い起こしても、特
にこれといった大きな出来事や事
件もなく、「こたつでみかん」の
ようにのんびりとしていたような
気がします。でも、この頃の体験
や鳥羽谷で過ごした時間が、自分
という人間の大切なベース(基礎)
となつているのでないかなと、最
近特に感じるようになりました。

(おおい町 在住)

「麻生野分校」に通っていた頃、
「大人になつたら都会に住む」と
いうのが夢であったが、実はその
理由は、当時自分が欲する物を購
入しようとする、徒歩一時間を
掛けて大鳥羽集落まで行かねばそ
れが叶わないというそんな不便さ
から脱却したかったからであり、
ある意味その頃の思いが実現した
現在、確かに様々な便利さは手に
入つたものの、この地の慢性的な
忙しさは静寂な海士坂で育つた私
にとつては苦痛の種となつてお
り、世の中は本当に皮肉なものだ

と改めて実感する今日この頃であ
る。

現在はこのように大阪に腰を下
ろした生活をしているが、ここ最
近は週末度に電車を乗り継いで海
士坂に帰省しており、その道中の
退屈な時間にはもっぱら音楽を聞い
て過ごしている。近頃は自分で録
音した古いテープを出してきては
昔流行の音楽曲を楽しんでいるの
だが、先日そのテープを選んでい
た時ふと珍しいものを見つけた。

それは私が社会人になりたての
頃、夢中で取り組んでいた青年団
の活動記録で、鳥羽地区青年団主
催の「弁論大会」の録音テープで
あった。とても懐かしい思いでそ
の頃の自分の弁論を聞いてみたら
「この鳥羽の地にしっかりと根を下
ろし、仲間と共にこの地を発展さ
せて行く！」と、以前私が夢に
思っていたこととは真逆のことを
述べており、しかし全体の構成と
してはまずまずの出来となつてい
たため少し誇らしくも思えたのだ
が、実はそのテープを聞いた瞬間、
もう一つ大事なことも思い出して
しまった。それは私がその弁論を
終えた直後の出来事で、ある先輩
に別の部屋に呼び出され「大叱れ」
を受けたことである。その内容は
「ホンマ、つまらん弁論やつた！
何で鳥羽の中に居ることに拘る？
何で外に出て鳥羽を見ようとしな
い？そんな事で鳥羽を良くして行
こうなんて全然説得力無い、ホン

マ小さい奴や！」と言うもので、
すつかり打ちのめされた私は『脱
け殻状態』になつてしまい、その
後の「閉会挨拶」は言うまでもな
く聞くにしのびないものとなつて
しまつていた。

そんなことがあつてから四半世
紀、このテープを聞くまではすつ
かり忘れていたこの出来事では
あつたが、地元を離れて暮らすよ
うになつた今、これまで無縁だつ
た「家事」が如何に大変なものか
を思い知つたり「家族」が普通に
身の周りにいてくれる有難さを考
えてみたり、そして「鳥羽」、「海
士坂」の素晴らしい環境を思い出
してみたりと、その先輩が云わん
とされていた事の意味がようやく
身を持って感じられる毎日であ
る。

今後、私の生活圏はどう変わつ
ていくかは分からないが、定年を
迎えるまでの十年余りはまだまだ
しつかりと企業戦士を続けて行か
ねばと思つており、この後様々な
環境の中で得られた貴重な体験は
次の時代を生きる若者や子供達に
伝え、「広い視野」を養つてもら
うのに少しでも役に立たせてもら
う。それが私を育ててくれた「鳥
羽」、「海士坂」への恩返しになる
と信じ、明日も又自転車をこいで
サラリーマンを頑張つていこうと
思っている。

(大阪府守口市 在住)



私を育ててくれたふる里

畑 中 規 江

(平成8年度卒)

二〇一四年一月、私は十一年ぶりに故郷・若狭町での生活をスタートしました。

私は三生野で生まれ育ちましたが、高校を卒業後すぐに兵庫県洲本市の企業に就職しました。きっかけは、高校の部活動として取り組んだボート競技です。高校では、強くて活気のある部活動に入りたかった私ですが、それまで見たことも、あまり聞いたこともなかったボート競技に何気なく興味を持ち、入部したのが長い競技生活のはじまりでした。年中ほとんど休みなしで早朝練習主体の厳しい部活生活でしたが、インターハイ等ではある程度の結果を得ることができ、できれば実業団チームで力を伸ばしたいという思いから旧三洋電機ボート部に入部しました。

実業団チームとしての練習は想像以上に厳しいものでした。早朝や仕事後からのトレーニング、県外や時には海外でも行われた合宿遠征、トレーニングの一環として出場したハーフマラソンやフルマラソン等々。しかし、これらは到底、自分の努力だけでは乗り越えられない事はありませんでした。高校の恩師やチームの監督をはじめ多く

の指導者の方々、そして共に刺激し合える沢山の仲間、会社が与えてくれた練習環境等があったからこそ、そこでの七年間のボート競技生活を続けることができました。今、感謝しきれないほどに様々な思いが込み上げてきます。

振り返ってみれば、そんな私の心身の土台を作ってくれたのは鳥羽小学校での鳥羽っ子時代だったのではないかと今改めて思うのです。私の鳥羽っ子時代と言えば、毎日、三生野から鳥羽小までの長い道のりを歩いた登下校や、学年や男女を問わず力いっぱい遊んだ鳥羽っ子タイムなどが思い出されます。

「むこう鏡の山高く」と校歌にも歌われていますが、三生野からの登下校は、距離が長く夏の日も寒い冬の日もよく六年間歩きおとしたものだなと今更ながらに思います。しかしその道のりは、今思えば毎日楽しいものでした。下校時はいつも開放感にあふれていました。帰りはいつも男の子と一緒に、少しでも早く帰ろうと道端の電柱を目印に競走したり、冬はカップズボン、長靴で時には雪道でのスリルも味わいながら毎日元

気に通い続けたものでした。

そうして積み上げられた心身の健康とともに、私の心の財産は、保育所時代からずっと一緒に過ごした同級生達です。仲間と出会って早や二十数年が経ちますが友人たちとの集まりでは、「あの子は今どうしてる」「小学校の時はこんなんやっとな」と自然と鳥羽っ子トークで盛り上がり、そこにはあの頃と変わらない空気が流れま

将来を思うと少々寂しく不安を感じます。とても難しい問題ですが、これからの若者にとって少しでも夢がもてる町や地域になっ

す。長い人生の中でどんな時にもお互い支えあえる仲間として、これから友との交流を大切にしていきたいと思っています。

今、地方においては若い人がどんどん少なくなっているといわれます。そしてそのことは私自身も感じます。少子化や地方の就職事情に加え、道路や通信網の発達で都会がより近くなりかえって県外に出やすいことなどそこには様々な背景があると思いますが、町の



教師という夢

島 津 明 里

(平成14年度卒)

私は教育大学を卒業し、教員採用試験に合格して、やっと小学生のころから抱いていた教師になるという夢を叶えることができました。教師になるという夢は、鳥羽

小学校に通っていたころに芽生えた夢だったと、この度の原稿依頼で懐かしく思い出しました。私が小学校の五年生になった年、初任の若い男の先生が鳥羽小

学校へとやってきました。春休み、いつものように友だちと鳥羽小学校へ集まって遊んでいたとき、職員室をのぞくとその先生が見えました。五年生の女の子、若い先生に興味津々で「五年生の担任の先生になってくれたらいいなあ」と期待に胸を膨らませていました。入学式の日、友だちと職員室をのぞいて目が合い、あわてて逃げ出したことを今でも覚えています。五年生の担任だと発表され、心の中でガッツポーズを決めました。それが、五年生、六年生と担任をしてくださった中出先生との出会いです。

中出先生は体育会系の先生で、男の子たちとすぐに仲良くなつて休日まで一緒に遊んでくれるようなお兄さんのような先生でした。女の子も中出先生を毎日質問攻めしていましたが、だんだんと反発してぶつかっていきました。今思うとなぜそんなことで：と思うのですが、小学生でしたので何かと反発したかったのだと思います。たくさん叱られて、話し合つて：それを繰り返していくうちにだんだんと先生に何でも打ち明けられるようになっていきました。小学校の五、六年生の時期に、こんなにも気持ちぶつけられる先生に出会えたことはとても幸せだったと思つています。そうして、小学校を「中出先生のこと大好き、担任の先生でよかった」という気

持ちを持って卒業していききました。このときはまだ、教師になりたいという夢を自覚していなかったのです。

中学校、高校と勉強に励むようになってから漠然と「教師」という仕事につきたいと思つている自分に気が付いていきました。そして教育大学へ行く、と決めてから、志望理由の記入用紙を前にペンを握り、自分と向き合うことになったのです。いつから教師になりたいたと思うようになったのだろうか、と考え始めてすぐに中出先生の顔が浮かんできました。そこで、「ああ、そうか、そうだった」と中出先生との出会いから教師という仕事への憧れを抱いていたことに気が付きました。小学生のころは気にとめていませんでしたが、遅くまで職員室の明りがつき、先生が仕事をしている姿を目にしていましたし、休日疲れているはずなのに私たちと遊んでくれていたことを思い出し、尊敬と感謝の気持ちが湧き上がりました。いつも真剣に私たちに向き合つてくださった先生、そんな先生になりたいたと心から願ひ、気が付けばペンを走らせていました。

それから先生と再会したのは、成人式の日。手紙やメールでのやりとりはしていましたが、久しぶりに会う先生の変わらぬみために驚きました。そして来年、二十五歳になった私と再会の約束をして

います。今年は、同じ教師という立場で先生と話ができることに、少し恥ずかしく：何より嬉しい気持ちです。「先生と出会えたこと



今の私の土台になるもの

高橋花帆

(平成21年度卒)

「がんばれ！」「応援しとんで！」
「ありがとう」

これらの言葉は人を元気づける魔法だと思えます。魔法の言葉は人と人との関係によつて生み出されます。私はこの一年、言葉のちからと人とのつながりの大切さを実感しました。

昨年三月、水泳をしている私はシンガポールへ遠征にいきました。初めての海外、初めての代表遠征、全てが初めての中で不安もありました。しかしそんな不安を一瞬にして自信に変える出来事がありました。シンガポールへ出発する前の日に、学校で友人たちからサプライズの激励があったのです。若狭高校に通う上中中学校卒業の同級生全員が集まつてくれて、私に「がんばれ！」「応援しとんで！」など激励の言葉を投げかけてくれました。私はとても嬉しくて改めて「がんばろう」と思うことができました。またみんな

で、夢を持ち、叶えることができました」と、十三年たった今年、やっと伝えることができそうです。(滋賀県大津市 在住)

に感謝の気持ちでいっぱい、全員に「ありがとう」と何度言つても足りないような気持ちでした。友だちがいて、私を励ましてくれて、応援してくれる。それが幸せなことであるということを思い出させてくれた出来事でした。

また、人との関わりの中で自分の考え方に変化が生じ、成長できたこともあり。昨年五月、私はつらい別れを経験しました。私を選手として小学生のときから育ててくださったコーチが突然辞めることになってしまったのです。とてもつらくて信じられなくて、たくさん泣きました。五月ということからシーズンが始まる大切な時期です。どうにか切り替えようとしていましたが、自分でも思うようにいかず焦りだけが先走つていました。そんなとき、当時の担任の先生がかけてくれた言葉が心に残っています。

「物事にはすべて自分にとって良

い面と悪い面がある。良い面を見ることができれば物事はいいものになるし、悪い面だけを見てしまうと物事は自分にとって悪いものになってしまう。」

これを聞いたときに、自分の中で納得しとても勇気づけられました。そこから少しずつ自分の気持ちを切り替えていきインターハイ、ジュニアオリンピック、国体と納得のいく結果を出すことが出来ました。

人と関わる。支えあう。それから生まれる素敵な言葉。鳥羽小学校に通っていた頃を振り返ると、このときにこれらの大切さや土台が気付かないうちに自分のなかでつくられ、身についていったのかな、と思います。休み時間には、学年、男女関係なく遊んだり、みんなで協力してひとつのものをつくりあげたり、いろいろな場面で人と関わる機会がありました。そのときは当たり前だと思っていました。今思うと、とても大切なことを学べたと思います。

今まで私はみんなからたくさん素敵な言葉をいただき、そのおかげでいろいろなことを乗り越えることができました。それらに対して常に「ありがとう」の言葉と、今ある人とのつながりを大切にしていきたいです。そして、また新しいつながりを築き、みんなに恩返しできるように鳥羽っ子らしく全力で頑張ります！

(若狭町無悪 在住)



学校の近況

【学年別児童数】

	男子	女子	計
1 年	11	7	18
2 年	11	8	19
3 年	7	10	17
4 年	8	8	16
5 年	8	9	17
6 年	16	13	29
計	61	55	116

【集落別児童数】

	男子	女子	計
大鳥羽	5	9	14
上黒田	4	5	9
麻生野	4	3	7
海土坂	3	4	7
三生野	5	2	7
無 悪	1	3	4
三 田	4	1	5
小 原	7	7	14
南	7	4	11
山 内	10	4	14
持 田	1	3	4
長 江	3	2	5
朝 霧	6	8	14
有 田	1	0	1
計	61	55	116

【平成26年度 教育目標】

自分の良さに気づき

向上心をもって生きる児童の育成

- ・自分から進んで学ぶ子の育成
- ・自分も友だちも大切にする子の育成
- ・丈夫な体づくりに取り組む子の育成

【主な行事】

4月	入学式・始業式・集落児童会・身体計測・PTA総会・全国学力調査・交通安全教室・敬老会
5月	春季遠足・内科検診・PTA奉仕作業・鳥羽リンピック・歯科検診
6月	プール清掃・前期校内研究会・プール開き・地域学校協議会・民生委員と語る会
7月	教育懇談会・PTA研修会・終業式・自然教室
8月	
9月	PTA奉仕作業・始業式
10月	町小学校陸上記録会・就学時健診・後期校内研究会・修学旅行・校内マラソン大会・秋季遠足
11月	町小中学校音楽会・地域学校協議会・避難訓練
12月	器械運動発表会・人権集会・町県学力調査・教育懇談会・教育講演会・終業式
1月	始業式・学校給食週間・鳥羽っ子学習発表会
2月	スキー教室・スケート教室・地域学校協議会
3月	6年生を送る会・卒業証書授与式・修了式

【職員構成】(平成26年4月現在)

職 名	校 長	教 頭	教 諭	養護教諭	講 師	事務員	支援員	調理員	校務員	合 計	合 計
男	1	1	3	0	1	0	0	0	0	6	17
女	0	0	5	1	1	1	1	1	1	11	

平成26年度 鳥羽小学校同窓会決算書

平成27年 3月 4日現在見込み

<収入の部>

(単位：円)

	26年度予算額	26年度決算額	比較増減	備 考
会 費	423,000	424,000	1,000	1,000円×424戸
協力金	8,400	8,400	0	職員700円×12人
寄付金	0	0	0	
雑収入	30	24	△6	利子他
繰越金	86,646	86,646	0	
合 計	518,076	519,070	994	

<支出の部>

(単位：円)

	26年度予算額	26年度決算額	比較増減	備 考
会議費	25,000	19,401	△5,599	役員会、理事会編集委員会
事務費	50,000	52,318	2,318	印刷インク、マスター用紙等
事業費	435,000	373,040	△61,960	
会 報	135,000	102,000	△33,000	同窓会報第24号原稿等送料
教育振興	300,000	271,040	△28,960	児童図書等、iPadスキーマット5巻、スキーストック達スキー・スケート教室補助
予備費	8,076	5,000	△3,076	
合 計	518,076	449,759	△68,317	

平成26年度 鳥羽小学校同窓会役員名簿

役員	集 落	氏 名
会 長	上黒田	澤 本 啓 一
副会長	海土坂	竹 内 小太衛
"	無 悪	高 田 雅 美
顧 問	三 田	小 林 銀右工門
"	無 悪	兼 松 勉
"	三 田	福 谷 洋
"	大鳥羽	松 宮 保 彦
"	三 田	岡 本 嘉 樹
"	校 長	高 橋 繁 応

役員	集 落	氏 名
幹 事	麻生野	三 宅 繁 樹
"	三生野	藤 内 寿 博
"	無 悪	竹 内 一 善
"	小 原	島 津 寿 末
"	長 江	谷 口 文 代
"	持 田	竹 内 収 平
"	大鳥羽	檜 鼻 ふじよ
事務局	教 頭	田 中 孝 明

役員	集 落	氏 名
理 事	大鳥羽	武 田 佳 子
"	"	畠 中 善 博
"	上黒田	溝 口 尚 美
"	"	澤 将 之
"	麻生野	原 田 太 輔
"	"	谷 口 慎 悟
"	海土坂	中 村 浩 樹
"	"	池 田 貴 一
"	三生野	畠 中 義 正
"	"	西 川 昇
"	無 悪	竹 内 正 幸
"	"	玉 井 克 幸

役員	集 落	氏 名
理 事	三 田	佐 野 久 男
"	"	山 本 勇 人
"	小 原	松 井 良 典
"	"	清 水 邦 夫
"	南	東 正 人
"	"	澤 田 涼 太
"	山 内	宇 野 幸 一
"	"	寺 西 浩 子
"	長 江	武 田 修 治
"	"	武 田 佳 代 子
"	持 田	大 下 宗 一 郎
"	"	三 宅 照 彦
"	朝 霧	檜 鼻 壯 栄

編集後記

今号も八名の方から母校への深く強い懐慕の念溢れる玉稿を賜りました。感謝申し上げます。

昨年七月に舞鶴若狭自動車道が開通し、想定以上の利用度であるようです。県内はもとより県外にお住まいの同窓生の皆様も帰郷の際には随分スムーズになったことでしょうか。

これでJR線、梅街道、高速度と揃いました。大鳥羽、上黒田、三田、無悪は胴体部であり、海土坂、山内を羽先とし、翼を大きく広げ飛んでいる鳥羽谷の完成です。勿論、心臓部は母校にあります。

「霊鳥輝く我が校旗」「教えのままに励まなん」同窓生の皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

(竹内記)

鳥羽谷で育む、心豊かな鳥羽の子



鳥羽地区敬老会



学校訪問コンサート



水泳学習(7月土曜授業)



町小学校陸上記録会



町小中音楽会



ダンス(10月土曜授業)



春季遠足



修学旅行



陶芸教室(11月土曜授業)



山内かぶら収穫



コウノトリ米の稲刈り



鳥羽っ子学習発表会(1月土曜授業)



1・2年そり活動



3・4年スケート教室



5・6年スキー教室